

緑街

かくら
こう



おはなしの喫茶室

詩編

彼の手帖



黒カフェ白

緑と化しゆく街の話をしましよ
う
緑に蝕まれる街の話を

「我々の行動はもはや植物に支配されている」

従属栄養生物である人間が
独立栄養生物である植物に

ほほ笑みながら屈する街の話を

雨雲の吐息が聞こえたなら

マダム・ピアノのカフェを探してください

僕はそこでコーヒーを淹れています

欲望を煮沸したコーヒーでも補給して

雨宿りの暇つぶしはいかがでしょう

いくらかでも話してさしあげましょう

緑に蝕まれる人間の話を



のぞみのぞむ

樂園の水が砂へ変じましたので
彼はのどを枯らして絶えました



マダム・ピアノ

「つまり鍵盤は雨の音なの」

マダム・ピアノの腰には根が生える

だからピアノの前からもう動けない

「あたくしの乱れた鍵盤でもあなたが聞きたがるのはそういう理由」

マダム・ピアノの根は蝸に似ている

床を破壊し地中を掘る蝸の足である

「雨がほしいのよ」

根より地中の水分と栄養を巻きあげ

なおかつ

経口より動物性蛋白質も酒精も摂取する

「一曲終わったらあなた煙草を買ってきてちょうだいな」

マダム・ピアノは枝葉を持たない

光合成するのが植物であるなら彼女はまた動物である



マダム・ピアノの運動はお喋りと鍵盤叩き

マダム・ピアノの好物はチョコレートとウイスキー

ひとまわりふたまわり

幹あるいは胴が

ふくよかに成長して年輪する

チョコレート製の腕が雨音を増幅させ

ウイスキー製の声のでたらの歌をつむぐ

マダム・ピアノの血液と樹液は

チョコレートとウイスキー

どちらの味でしょうか

「舐めてみてもよろしいのよ」

ピアノに厭きた彼女が煙を吐く

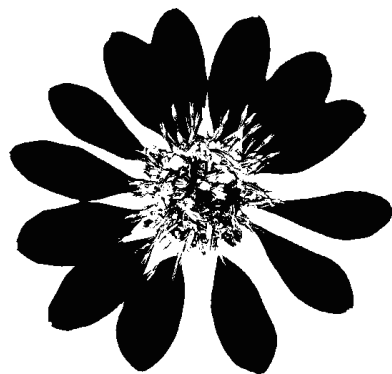


予言

神さまはあなたへ
種子を授けました
万事満ちれば
ふさわしい芽が
生まれるでしょう



これはかつて教師が予言した抽象的未來
しかし緑街では唯ひとりの例外なく具象化する
現実である



片恋

あのひとが笑うと蜜の匂いがした
あのひとの涙は蜜の甘さだろうか
あの白い肌を針で突きたいのです



悪魔

悪魔というものは私のことでしょう
赤のしたたる生肉をむさぼりますし
さかしま平気に草を引き抜きますし
影が地平を焼くことを知っています
私の影はじりじりと伸びて膨らんで
裏庭を覆い鉄塔を覆い灯台を覆って
海原を覆い大陸を覆い地球を覆って
宇宙までも征服せんといたしますが
宇宙は悪魔なぞよりずっと濃いので
大気圏を抜けた影はとたん引火して
もろとも私は爆発してしまうのです

実のところ宇宙というのはそうして
さまざまな濃淡の影を吸いこんでは
火をつけ灰も残さずさっぱり清浄と
暗黒の一部分にしてしまいますので
私はこころ安らかに影を伸ばせます
机の向こうへ座るのもまた影をもつ
宇宙の闇によって引火する影をもつ
あとに残らぬ悪魔なのでしょうから

夏のラジオ



……ノイズ

聞きとれない音だから耳を立てた

……日陰

四本の脚を並べて入道雲の涙を待った

……ダブネー

月桂樹で涼むアポロンの幸福についての考察

……ピアズリー

扇から盗み見る　めくるめく悪夢へいつか堂々と棲みたい

……蟻

僕らのあいだのアイスに溺れる

眠り姫または王子または

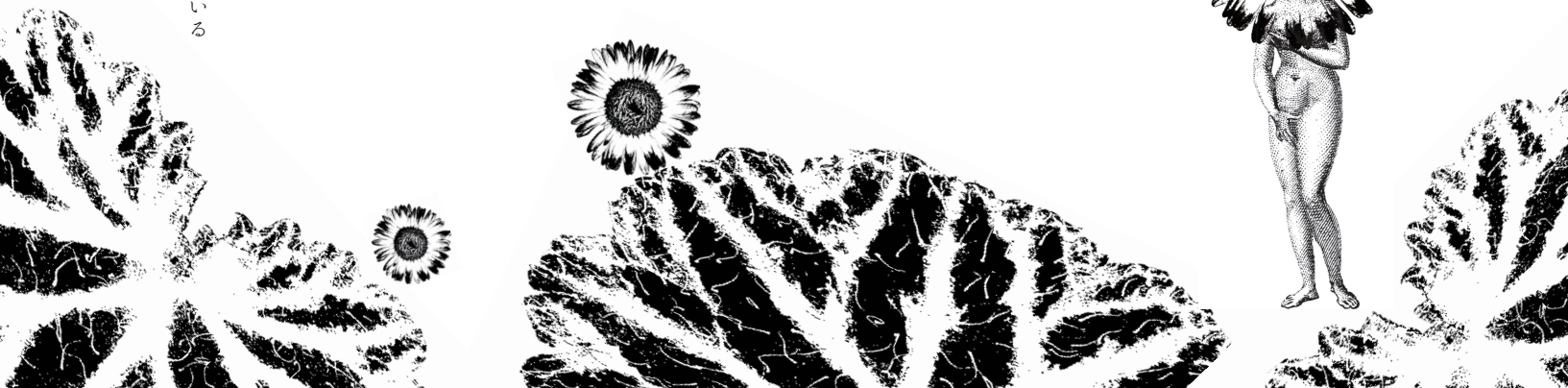


胎児を宿して緑化した女がいた
夏の末期に実を残して枯れた
胎児は種子へ保管された

ところで植物の種子は
生育できる環境が整うまで
百年も千年も仮死状態で眠るといふ

生きていけますか
生きていけますか

殻のなか
種子は感じている
きつと呼びかけている
神さまの声がお光りになるのを待っている



家族劇場

包丁傷のあるテーブルが舞台
役者はふたり 母と子を装え

ぎこちない大根芝居

観客は鍋と皿と湯気

台詞捏造すれば閉幕

おやすみなさい



ハーブル・パーブル・ピーブル・フェステイバル

緑のあいだを風が吹き

朝露をふるい落ととして

十二弦の色調を奏でる

頸椎から芽の生えた男が猿を操る

左腕が枝になった女が小鳥を歌わせる

臍から蔓を伸ばす女がリボンとともに舞う

晴天なり

今日はフェステイバル

踊りましょう 光合成しましょう ねえ

$6CO_2 + 12H_2O \rightarrow C_6H_{12}O_6 + 6H_2O + 6O_2$

ラベンダー娘踊る
雨雲を呼ぶ太鼓隊
乱れ乱れる紫模様

脊髄を根に縛られた男を猿が操る

大樹となった女は小鳥を雨宿りさせる

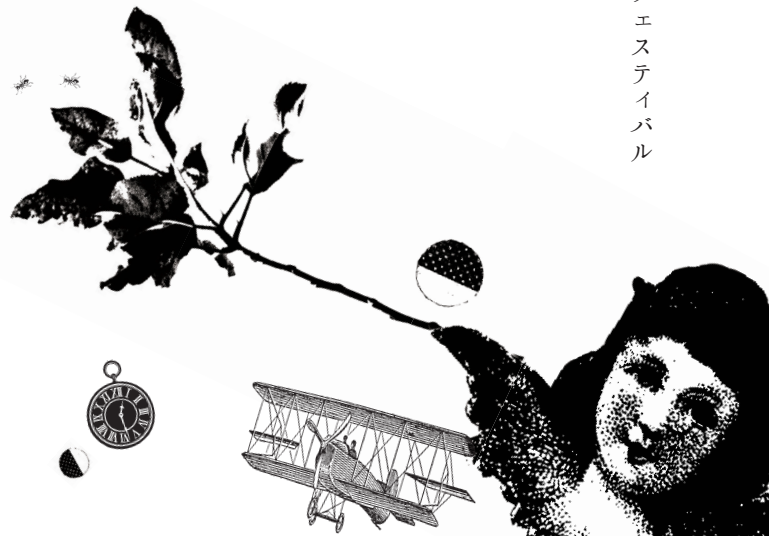
臍から垂れた蔓の果てに女は実を残し老衰

雨天決行

今日はフェステイバル

叫びましょう 呼吸しましょう ねえ

$C_6H_{12}O_6 + 6H_2O + 6O_2 \rightarrow 6CO_2 + 12H_2O$



序

一.

竜の姿をした島国の腹のあたりに雨ヶ崎植物研究都市はある。「砂漠に緑を。地球を豊かな惑星に。生類全体の共存共栄」を理念とする雨ヶ崎植物研究所を中心として都市は形成される。全体が研究対象である。全体とはすなわち植物建築物住人である。

二.

数台の大型バスが雨ヶ崎植物研究都市の大門を通過するのは冬である。四方を山に囲まれた谷底に都市はある。冬風吹きすさぶ険しい山道を削りバスが走る。カーテンの下ろされたバスは大門へ吸いこまれ、ほどなく排出される。それは数日おきに繰り返される。

三.

西の山を越えた麓の村にひとつ怪談がある。とある村人が新月の夜に遭遇したのは顔がヒマワリでできた人間だった。ヒマワリ人間はこうべを下げて礼儀正しく挨拶し、畦道を

去ったという。腰を抜かした村人は翌朝になって家へ戻った。

四.

とあるアルコール依存のゴシップ誌記者は、うさんくさい施設だと仕事仲間へ息巻いて雨ヶ崎植物研究都市へ潜入した。数週間後、仲間のひとりが彼と会った。おかしな処のない「普通の真面目」な植物研究所だったと記者は語った。ついでに記者はアルコール依存から脱し、「普通の真面目」な男になっていたという。

五.

山東の麓に住む子らが肝試しとして山深く踏み入り、雨ヶ崎植物研究都市の塀を登った。ひとりが塀を越えた時、警備員が駆けつけて残り数名を補導した。塀を越えた子は一週間ほど経ったのち、研究所所員によって自宅へ送り届けられた。広大な森で迷った恐怖からか、その一週間の記憶はないという。

六.

従属栄養生物である人間はいくつかのアミノ酸を植物や微生物から得て命をつなぐ。独立栄養生物である植物は自らの生存に必要な有機物をすべてつくりだすことができる。

七.

雨ヶ崎植物研究都市はおよそ六十年前に開発が始まった。当初は初代所長である雨ヶ崎雨太郎の屋敷を中心とした小規模な研究施設であった。徐々に森を拓き道を敷き塀を拡大し、現在は研究棟も増設され、住人の暮らしを支える住人管理棟や保健管理棟といった施設の整備も進んでいる。

八.

移住者募集は国公立大学病院や市町村役場にて秘密裏に行われる。雨ヶ崎植物研究所の派遣する専属移住コーディネーターが存在する。彼らは白いシャツを黒のスーツで簡素に

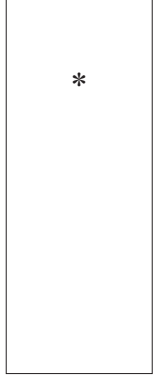
締め、物腰やわらかく、口角へ笑みを保ち、受容的共感的態度で移住希望者へ接する。

九.

移住者の生活はすべて研究所が保障する。研究へ協力する代償として不自由のない快適な暮らしが約束される。ただし移住後は二度と研究都市から出ることはできない。

十.

研究所員ならびに住人は雨ヶ崎植物研究都市を緑街と通称する。



キイは梅の木の下で目を覚ました。ほのかにでもキイをあたためるため、梅が花びらを散り積もらせていた。梅は昨日まで歌を口ずさんでいた。そう、昨日まで梅は人間の女だったといって、さてだれが信じるのか。しかしそれは緑街ではしごく当然のこと。ここでは人間が植物へ変ずる。キイは梅の幹へ耳を当てた。彼女の歌はもう聞こえなかった。

*

キイというのは本当の名ではない。緑街ではいくらでも偽りが許される。やわらかい嘘へ好きなだけ溺れていい。夢のなかを生きたことを責める者はいない。キイ。それは意味をはぎとったただの音である。

*

キイは花びらをひとひらずつ丁寧を集めた。軽やかな白い花びらはもう聞けない彼女の歌に似ている。はらりはらりと舞う、やわらかな声だった。こうして振り返ればあの声にもすでに梅の香りが漂っていた。兆候はあらわれていたのだ。キイは花びらを嘔む。花び

らを飲んで彼女の歌を体内へ吸収する。ただの薄い花びらだよ。聞こえないはずの音が耳へそよいだ。立ちあがろうとして眩暈を覚える。キイは眩暈症だ。緑街移住以来、植物へ変わる人間を見るたび眩暈に倒れた。立ちあがることを諦めてキイは梅の根元へ再び臥床した。青空、小鳥が花をついばみに来る。ついばまれることなど彼女は芯から了解しているだろう。彼女は小鳥の腹へ搭乗し、キイの知らぬ処へ旅立っていく。

*

彼女の、梅になる前の名をフウコという。フウコと出会った日のことをキイはよく覚えていない。緑街への移住者は移住初期の記憶を保持しない者が多い。いつのまにか住んでいた。馴染んでいた。そして移住以前の記憶は半透明の膜に包まれる。ただ、自らの希望で移住を決定したことだけはしっかり意識している。しかしキイはこれも自覚がない。薄く翳る霧に包まれた移住初期、フウコはキイの案内係として側にいた。

*

つまりヒヨコ。とフウコは笑った。ヒヨコとしてあなたは私に愛着を持っているだけなの。そう笑ってキイを近づけなかった。フウコの鼻歌はいつもわずかに音が外れていた。その音の外れ方が好きだとキイが告白してもフウコは相手にしなかった。キイがフウコといっしょにいたのは、短い冬の間だけ。

*

アポローンは幸福だろうか。アポローンはダブネーに恋をした。ダブネーは月桂樹に変わってアポローンを拒絶した。アポローンはきつと月桂樹の下で昼寝をしたに違いない。いとおしく幹へ口づけたに違いない。キイは眩暈のなか想像する。硬い幹にやわらかなダブネーを重ねて、アポローンは幸福だったろうか。

*

うたた寝のあと、眩暈はおさまっていた。キイは身を起こす。背の低い梅の木は、根元近くから幹がわかれ、キイの頭をなでるようにして枝が広がっていた。一番太い処の幹で

ささえ、フウコの太腿ほどもあるかどうか。華奢な梅である。親しげにはころぶつぼみへ、キイは鼻先で触れた。また来てもいいかな。いつもの遠慮がちな伺いを繰り返す。かつてのフウコはいいとも悪いとも云わなかった。今も同じだ。梅はなにも返さない。また来るね。そしてキイの残す言葉も同じだった。

*

キイはシナモンとコリアンダーの効いたチョコレートを市場で入手して、マダム・ピアノのカフェの扉を開けた。カフェでは生き物たちがそれぞれの椅子で静かに呼吸している。まだ人間のもの、半分植物のもの。種は発芽できる条件が整うまで眠るのだという。カフェはまるで冬眠の地中である。満ちる時を待っている。

*

マダム・ピアノは若い娘によってマニキュアを塗られていた。キイが声を掛けると娘は椅子を譲った。仕上がったからいいの。はにかむ娘にキイはチョコレートを一いつ渡した。

もうひとつをマダムへ。マダムの腰から下は根である。根がカフェの床を突き抜けて地中へつながる。マダムの向かうアップライトピアノは根によってわずかに傾斜する。傾斜したピアノをマダムは弾く。譜面を読めない彼女は、根が吸いあげた大地の詩を鍵盤で音に変換するのだとぞぶく。

*

フウコが梅になったよ。キイが告げた。マダムとフウコは長いつきあいだった。緑街へ来る前に、マダムの夫の最期の呼吸を看たのはフウコだという。ずいぶん長く呼吸を休んだあと、なにか喋るみたいに息を吐いた。開いた目は天井じゃなくてきつともっと高い処を見ていた。もうずっと前から彼の魂はあのベッドにはいなかった。身体だけがあとから逝った。彼はきつとあなたの隣にいたのね。フウコの言葉をマダムは覚えている。夫はあたくしの隣になどいない。今も昔もこれからも。なにも知らないくせに。フウコを罵ったことを覚えている。フウコもシナモンとコリアンダーのチョコレートが好きだった。ブランドーとチョコレートとビール。フウコとマダムをつなぐもの。甘く狂うピアノのでたらめ。譜面台の画集を見つめて静止したマダムの隣を離れてカウンター席へ座り、眠気と眩

暈をごまかすためにコーヒーを飲み、キイはカフェを出た。フウコの植物化を知らせるべきひとびとを巡らなければならない。

*

ポケットには花びらがある。キイは画廊へ来た。裏通りの画廊はとあるひとりの画家の絵だけを飾る。画家は水の張られたガラス鉢に浮いている。下半身は根になり、水を吸い上げる。紙を差し出されると涙のように絵の具を落とす。彼は過去の記憶を描いているのです、と初老の画商がことさら悲しげな口ぶりで語る。フウコは水鉢の画家を整えによく来ていた。髭を剃り、髪を洗い、目やにを拭いた。カフェの話をしながら。季節の花を水へ浮かべて。雲の変幻を教え。音の外れた鼻歌を歌った。痩せて骨の透ける水鉢画家はほとんど表情を動かさなかった。声を発しなかった。それでも彼女は画家へ接触しつづけた。フウコが梅になったよ。キイは初めて画家へ話し掛けた。だれに対しても反応を示さない画家である。皮膚の内側には脂肪や筋肉や骨ではない植物の細胞が詰まっているような恐さがあった。きれいな梅になったよ。甘い匂いだよ。ほら。キイはポケットから花びらを取り、水鉢の画家の前へ広げる。黒い目は深淵をさまよったまま。なにをも映していると

は思えない。キイは花びらを水へ浮かべる。いい匂いでしよう、フウコの匂いだよ。

*

キイはラベンダー専門店を訪ねた。ラベンダーは頭皮から発芽することが多い。ここはラベンダーを発芽した人間が集まり、収穫したラベンダーを元に精油やポプリなどをつくる店だ。フウコは毎年の収穫を楽しみにしていた。ラベンダー歴五年の女主人はフウコと同年だった。フウコにだけ頭へ鉢をいれることを許していた。悪い仲間だから特別にね、と女主人はわざと厳めしく鉢をフウコへ預けた。根に脳を浸食されて失明した女主人のためにフウコは本を読み聞かせたものだった。下世話な本が多かった。ふたりの間には饒舌と冗談しかなかった。女主人は長椅子へ身を横たえたままキイの告げる知らせを聞いた。ラベンダーを咲かせた人間の寿命は数年だという。彼女は最近身体に水が溜まって動きが鈍く眠気も強い。ついつい眠ってしまう。潮時を考え、ほとんどの業務はすでに若手へ託した。もし今年私のラベンダーを収穫刈できたらフウコへ持って行ってもらいたいね。あなたにお願いできるかしら。女主人は眠気を振り払い、キイの手を握った。キイは力強く握り返した。店を出て匂いを嗅ぐと手からラベンダーがほのかに漂った。

*

空は青い。山の斜面を駆け下りる風が冷たい。梅が咲くにはまだ少し早かったのにとキイは思った。

*

大切なことを忘れていた。ダブネーへまだ知らせていない。フウコの部屋へ行かねばならない。彼女の部屋は東棟二〇九号室。居住棟の螺旋階段を昇りながらキイは眩暈を覚える。螺旋階段の渦が加速する。鉄柵へもたれる。昨日、軽やかに螺旋階段を下りた彼女の姿を思い出す。空気をはらんだフレアスカートは梅の枝ぶりと似ていた。昨日の今頃、彼女は人間だった。眩暈に抵抗しながら二〇九号室へたどり着き、鍵を回した。鍵は彼女が梅になった時に脱ぎ捨てたコートのポケットから拝借していた。ドアを開くと足下を大きな塊が走り抜けた。ダブネーだった。彼女がいつしよに暮らした三毛猫である。ダブネー、フウコが梅になったよ。キイは走り去ろうとするダブネーへ声を放った。尻尾をびんと立てて止まり、ダブネーは顔だけ振り返る。賢い眼差しに、どこにいるの、と問われた気が

して、キイは居住棟広場東の落葉樹林だと教えた。答えを受け取って、ダブネーは螺旋階段を飛び降りた。

*

二〇九号室へキイが入るのは初めてである。ラベンダーがうつすらと漂う玄関口。彼女の楚々とした足の形が印されたサンダル。移住者には一室のみが与えられ、どの部屋も同じ造りだ。洗面台があり、ベッドとクローゼットが備えつけられている。しかし二〇九号室は特別な場所としてキイには感じられた。洗面所にはいくつかの小瓶と櫛がある。鏡はきれいに磨かれていた。この鏡に毎日フウコが映っていた。彼女は顔の左側をいつも布で隠していた。キイは素顔を知らない。櫛には細い髪がからまっている。それは梅になりそこねたくせに、どこか花びらの気配がする。ベッドは乱れたままだ。枕はくぼみ、シーツには皺が寄っている。床へひざまずき、恐る恐るベッドへ触れた。シーツは冷たい。顔を埋める。呼吸して気づく。はつきりと梅の匂いがある。やはり植物になる兆候はあったのだ。自分が察しなかったただけだった。胸へ潮が満ちてくる。シーツを強く握りしめた。

*

迫害された女は船へ乗った。海は荒ぶる涙だった。彼女が幼い頃から憧れたのは赤の映える国。竜神に守られる国。しかし彼女の密航する船は別の大陸へ行くものだった。新天地でも彼女は迫害の対象だった。糞尿の臭う路地裏、足を踏み手を叩き、彼女は密やかに故郷のリズムで踊った。竜の国へ連れて行ってあげようか。痩せ細った彼女を異国の紳士が捕獲した。彼女は種子を投与された。緑色の子を生み、彼女は夢へ墮ちた。子は母が世話をしなくとも水と光で生きた。母子は紳士に連れられて船へ乗った。

*

開いた窓から冷たい風が吹きこんで、キイは顔をあげた。雲間に細い月があった。生まれたばかりの月なのか消えゆく月なのかキイにはわからない。ただ、梅の匂いのする月だった。二〇九号室を出て居住棟広場を歩いているとかすかな歌声が聞こえた。どこからともなく始まり、何気なく引き継がれ、いつのまにかいくつかの音階を生じ、途絶えてはまた始まる。それは木々の歌だ。かつて人間だった木が歌う。それは消えそうな街灯の点滅に

似ている。キイは耳を両手で塞ぐ。今夜は聞きたくない。

*

白い寝台で眠る白い女へ白い月が落ちてくる。と、塞いだ耳へ滑りこむ大きな歌声があった。百年先生と呼ばれる大銀杏の声だった。百年先生は居住棟広場の南へ根を張る。冬の野外映画鑑賞会では、百年先生の枝の下へフウコと並んで座った。彼女のかじかんだ手からコーヒーカーップが百年先生の根へ落ちた。ごめんなさい先生、火傷してませんか。彼女はハンカチでコーヒーマグを拭いた。

*

フウコは梅になりましたよ。キイは百年先生へ教えた。百年先生は歌いつづけている。フウコが梅になりました。キイは百年先生の声に張り合って叫んだ。白い寝台で眠る白い女へ白い月が落ちてくる。フウコは梅になりました。白い寝台で眠る女へ月が落ちてくる。フウコが梅に。白い寝台で眠るフウコへ月が落ちてくる。フウコが。フウコへ月が。フウ

コが月に。白いフウコが月に堕ちる。居住棟の窓へほつほつと灯りが灯る。フウコを知る住人たちが起きたのだ。フウコが梅になったの。フウコが月へ堕ちたの。それぞれの声が重なって、木々までが相乗して、リズムが崩れて、常緑の葉が舞って、意味が落ちて、世界が渦を巻き、キイが眩暈に倒れた。フウコが梅になってしまったのです。

*

巨大な猫の影が螺旋階段を下る。追いかけているのだ。顔の欠けた女を。ひるがえったスカートは花を舞わせる枝になる。樹皮には三日月の爪痕が刻まれている。それは幸福の証なのだ。猫が教える。眩暈の夜にキイが見た夢のひとつ。

*

木の根は地中で混線する。混線を解除する依頼を受けた脱獄者が地下街へ潜入する。脱獄者は大銀杏である。これもキイの見た夢のひとつ。

*

白い鍵盤が押されるとどこかの屋上に花が咲く。黒い鍵盤が押されると電信柱が木へ変わる。激しい悲劇の曲が響く時、花は無限に咲き、整然と木々が並び、舗道はめくれあがり、建築は崩れ、地球が割れて宇宙へ向かって発芽する。これもキイの見た夢。

*

山高帽をかぶった白骨体が首へネクタイを巻くのを月の顔をした女が手伝う。女の手が双子の頬を順番になでて突然枯れる。干涸びた月を抱える白骨体は行儀よく膝を折り腰を折り腕を折り首を折り棺へおさまる。これもキイの夢。

*

夢はからまり、ぶつかりあい、砕け、溶けて、熱く冷たく体内をめぐっていく。万華鏡模様。回転を止めるまで夢は絶えない。人間が植物と化す緑街へ来てからキイは万華鏡の

内部に棲む。キイにとってフウコは点だった。一点を凝視することで容赦ない回転に耐えていたのだ。

*

緑街へバスで運ばれたあと、移住者は数週間に渡る移住者講習会へ出席させられる。講習会では催眠状態へ誘導され、緑街の概要を知らされる。人間と植物の共生に関わる研究へ協力するという以上の子細を移住者は講習会で初めて知る。心的負担を軽減するための処置が必要である。段階を追って情報が明らかになる。種子を体内へ投与され、発芽し、どのような姿へ変容しうるかという説明に及ぶ時、ほとんどの移住者は穏やかにそれを受容する。穏やかというのは精神的には恐怖がなく、身体的には険重く口は半開きで流涎し四肢脱力の状態である。非常に穏やかな状態に誘導された移住者たちは、緑街での快適な暮らしについて延々と刷りこまれる。

*

講習終了後、朦朧とした意識状態のなか、移住者は数種類の種子を投与される。いつな
にが発芽するのか、完全に植物となるか半植物となるか部分植物となるか予測できない。
予測できない未来だが緑街の移住者は受容的に暮らす。それぞれが自らの意志で移住し、
研究へ協力することを決めたという刷りこみが徹底しているからだ。しかしキイだけは自
らの意志で移住をしていない。これは緑街で研究が開始されてから初めてのことである。

*

キイが眩暈を起こすのは拒否反応だとウキシマは考えている。ウキシマとは緑街の住人
管理棟の管理責任者である。眩暈に悩まされるキイを現在ウキシマが預かっている。その
ため眩暈を起こしたキイが保健管理棟へ搬送されるとウキシマへ連絡される。今夜も通知
が鳴り、ウキシマは寝間着に外套を重ねてすぐさま自宅を出た。

*

キイが初めて眩暈を起こしたのは森のなかだった。初回健診で保健管理棟を訪れた際、

移住に関与したというコーディネーターから親しげにキイは話し掛けられた。しかし、コー
ディネーターを覚えていなかった。実際に会ったことがないのだから当然である。なぜな
らコーディネーターが接触し緑街移住を手配したのは、キイの双子の片割れに対してだっ
ただのだから。

*

コンニチハ、如何デスカ、緑街ニハ慣レマシタカ。オバサマモ治療ニ励ンデイラツシャ
イマスヨ。双子ノゴ兄弟ガヨク面倒ヲ看テクダサツテ。

*

コーディネーターとの接触が引き金となつて、キイは刷りこまれた記憶の齟齬に気づい
た。そして緑街の異常性が意識化された。ひとが植物になるのが自然だという暗示が解け
てしまった。キイは緑街を脱走しようとして森へ入った。枯れ葉のやわらかな堆積。風が
大きく鳴り、赤い夕暮れが木々を濡らし、黒い影がいくつも伸びていた。赤と黒の森をキ

イは走った。走り疲れて歩をゆるめ、かすかな歌声が聞こえて振り向いた。木の幹に無数の唇があった。幹が歌っていた。森はすべて植物になった人間なのかもしれないとキイは思った。その時視界が回転した。よろめきつまずいた木の根は男の太腿だった。すね毛が生えていた。キイはかがみこんで胃液を吐いた。落ち葉が人間の手の形をしていた。朽ちた人間の手が、膝の下に、つま先の下にあった。よくよく見れば枯れ枝として踏んでいたものも白骨だった。ほきほきと折れる白骨だった。額に背中に冷たい汗がじつとりと湿った。呼吸しても呼吸しても息苦しく、空気を探り当てられなかった。枯れた遺体の蓄積のたうつキイを、百の千の万の目が見ていた。そして白いベッドの上でキイは目覚めた。ベッドサイドの椅子に座り、心配そうにキイを見つめていたフウコと目が合った。回転する世界の動かぬ一点として彼女が機能し始めたのはその瞬間だった。

*

ウキシマが保健管理棟へ到着すると、キイは点滴を受けて眠っている処だった。別室で今回の経緯と治療について職員から話を聞く。眩暈の引き金は案内係のフウコが梅になったことだと知らされる。今夜はこのまま保健管理棟で経過観察し、明日の状態によって帰

宅できるか判断することを相談した。付き添う必要はなかったが、ウキシマはキイの眠る一室でしばし過ごした。ベッドサイドの円椅子へ腰掛け、ただ静かにキイの寝息を聞いた。ウキシマは数十年前に子を生んだことがある。生まれた子に産声はなかった。助産師も医師も無言だった。彼女は泣かない子を受け取った。もしも子が育っていたなら、丁度キイと同じ年頃である。キイの細い手首をそつと布団へ戻し、ウキシマは部屋をあとにした。

*

ウキシマには五葉松へ変じた友人がいる。線香花火のような葉をぶらさげ、友人はウキシマの家の裏手の斜面に立つ。一度も枝の形を整えられたことなどない大きな五葉松だ。地面へ垂れる古い枝、天へ伸びる新しい枝。りんとした鋭い葉。研究員として緑街へ来た友人は自らに種子を植えた。移住者が得にくい時代のことだった。帰路、ウキシマは五葉松へキイが初めて近いひとの植物化を経験したことを話した。新しいひとが完全に植物化する衝撃をウキシマは知っている。しかし体に刻んだはずの痛みを今は感じない。もう何人も植物になるひとを見た。あなたは慣れていると新しい管理員や研究員に云われると責めを感じる。その言葉へ反発することも昔はあった。今では確かに慣れたのだと思う。

植物になったとしても生きていてはいないか。姿形が変わっただけのこと。同じ時を同じ空間を共有している。しかしそれを伝えたとして亀裂の生じたばかりのキイの心臓が修復されるはずもないことをウキシマは重々承知している。

*

客の退いたカフェでひとり、マダム・ピアノはフウコの膝を思い出していた。夏の盛りのことである。フウコはマダムの隣へ脚を抱えて座っていた。りんごのような膝へ顎をのせて譜面台の画集をめくった。ピアズリーの画集だった。窮屈な世の中への反抗、いかがわしき繊細、魂の情熱、紙上の詩情。マダムはウイスキー、フウコはビール。ふたりは黙って画集を鑑賞した。その時マダムは想像した。フウコがりんごの木になるのを。禁断の実を腕へぶら下げるのを。あざやかな香りを放つのを。けれど、そう、あの子、梅になったの。あたくし、あなたの実を食べてみたかった。だれもないカフェにマダムの声が響いた。

*

その頃、長椅子へ横たわるラベンダーの女主人は身の置き処なく緩慢に寝返りを打った。ラベンダーの根がどう入り組んでいるのか知れないが、腕や足がしびれている。視力を失ったのは去年の夏の盛り。頭皮のラベンダーがだいぶ咲いた頃だった。己の花の香りになくさめられた。失明したことをフウコへ伝えると、頬へ冷たいものを押し当てられた。彼女が土産に買って来たアイスクリームだった。バナラとチョコとどっちがいいかな。バナラと答えると、口へバナラが運ばれた。今日は甘やかしてあげるよ。彼女の声もバナラの匂いがした。

*

明け方に浅い眠りから覚めた水鉢の画家は、水面へ浮く花びらをすくって口へ入れた。画家が口からものを食べるのは極めて稀である。薄い花びらは口蓋へはりついた。萎縮した舌でそれをなんとか巻き取り、しばらく味わった。以前、薄荷を水鉢へ混ぜられたことがある。画家はそれを思い出した。夏の盛りだった。ごめんね、涼しくなるかと思ったの。薄荷の匂いに吐いた画家の、鉢の水を取り替えながらフウコが謝った。画家は力なくふるえる手で花びらを拾い、口へ運んだ。東の小窓を通過する鮮烈な光が彼の横顔を照らした。

*

生まれたての太陽からダブネーが飛び降り、百年先生の枝へ乗った。百年先生は根で地中を探り、居住棟広場東の林で梅を発見した。やあ、フウコ。百年先生が呼びかけると梅はわずかに枝を振った。

*

一晩明けて眩暈の治まったキイは午后になって帰宅を許可された。帰宅といっても、他人であるウキシマの家である。家主が仕事で不在のなか、昼日中、勝手に家へ入るの気が引ける。マダム・ピアノのカフェで時間を潰すことにした。今日もマダムは客にせがまれて、でたらめな鍵盤演奏の昔語りをしている。

*

あたくしはかつて洞窟で暮らしたの。海を見渡す崖にある洞窟よ。食べることに眠るこ

と、大切だったのはそれだけ。今と大して変わらない。違うとすれば、いつでも狂おしい潮風に吹かれていたことくらい。

*

バイクで北から南へ逃走したこともあるわ。オレンジを齧りながら。若かりしあたくし、はちきれる太ももをぎらつかせていたのよ。そんな太ももに南から北へ逃走してきた男が食いついたのよ。生まれた子どもにもあたくしたちの逃走愛好癖は強烈に遺伝したわ。三人それぞれに家出したわけ。だれもいなくなった家の窓辺には空の鳥籠が残されたはずよ。あなた、あれ取って来てくれないかしら。

*

あたくしが少女時代に住んだアパートメントの中庭にはプールがあったわ。アザラシみたいな女ばかり浮いていたわ。あたくしはそこで鰐だったの。真つ赤なりボンをつけた鰐よ。もちろんみんなの注目の的。アザラシなんて飲みこんでしまうのよ。まる飲みよ。

*

白銀の髪をした子どもと暮らしたことがあるわ。洞窟時代ね。えくぼのある女の子。新月の夜にやって来て洞窟を水浸しにしてくれたわ。釣りを教えても糸に身をからめるばかりだったけれど、魚を口で捕まえるのは上手だった。そのうちちいさな足に鱗が生えてきたから、あれは人魚の類だったのでしょうね。また真つ暗な新月の夜にいなくなつたわ。肌がひんやりしていて、抱いて寝ると海に浮かんでいるみたいだった。

*

マダムは太い指で鍵盤を鳴らす。譜面を読まないその音楽は人生の音楽なのかもしれない。人生をかたる。語りなのか騙りなのか、マダム・ピアノのカフェでは問題にされない。キイにはそれが居心地よかった。

*

砂漠に緑を。地球を豊かな惑星に。生類全体の共存共栄。というのが雨ヶ崎植物研究所の理念である。人類以外の生類、植物やその他動物などへ害を及ぼさず人類が地球で生きる術について彼らは研究する。なおかつ砂と化した地域へ新たに植物を茂らせる術を探る。また植物の再生する力をなんらかの欠損を持った人間へ応用する術を模索する。究極的に人類が植物の機能を持つことを目指す。雨ヶ崎植物研究都市通称緑街への移住者は生類全体へ幸福をもたらしうる研究へその身体をもって協賛するのである。

*

フウコが梅になって数日が経ち、キイは剃刀を準備して水鉢の画家を訪ねた。少なくとも二日に一度は剃らないとだめね、あなたは。フウコがそう話しながら画家の髭を剃っていたのを思い出したからだ。不健康な色味の肌に黒い髭が目立っていた。よくよく見るとそれは根だった。画商に根を落としてもいいのか確認すると問題ないと返された。石鹸を泡立てて画家の顔へ塗る。剃刀を肌へ滑らせる。髭のような根を落とす。手を伝う硬い感触に鳥肌が立つ。画家のうつろな目がゆっくりと瞬きした。嫌悪を見抜かれた気がした。キイは画家が苦手だった。腐り落ちながら根を増やしている胴体。鉢から漂う生臭さ。フ

ウコは水へ沈殿する肉の破片も柄杓ですくってやっていた。肉をすくい、バケツへ捨てた。粘着する音にキイは顔をそむけた。そんなキイに彼女は云った。つきあわなくていいんだよ。私はわりと慣れているの。緑街に来る前はこういう仕事をしていたから。彼女が手際よく作業したあと、画家の周囲はさっぱりと清潔になっていた。ある日、カフェで彼女が教えてくれた話がある。

*

彼がまだ喋れた頃にね、昔のことを少し聞き出したの。私たちって緑街へ来る前のことはぼんやりとしか覚えてないでしょう。でもね、すごく印象的だったこととか、身体に染み付いたことはちゃんと覚えているものなの。彼は昔世界を放浪していたんだって。鬼に両足をもがれて歩けないようにされて、籠にかつがれていろんな処へ連れていかれたんだって。もう、あらゆる処。生身ではたどりつけない場所。ひとが絶対知り得ない景色よ。恐ろしい処。うつくしい処。鬼といっしょでなければ描けない絵をたくさん描いたの。鬼が彼の才能をひとり占めしたの。けれど、ある時鬼が退治されてしまったの。助かったはずなのに、まるで心臓をえぐり取られたみたいだったって。ねえ、それってどんな感じか

わかるかな。彼にとって描くことがすべてだったはずなのに。恐ろしい鬼の熱い温度を失ったことに耐えられなかったの。だから彼は緑街へ来たの。僕は鬼に生かされていたのです。あらゆる意味で。彼がそう云って描いたのは、きっと鬼の涙なんだと思う。

*

ねえ、それってどんな感じかわかるかな。

*

わかるよ、とキイは今になって答える。どうしてひとはいなくなる時に身体はどこかを持っていてしまうのだろう。いや、フウコはいなくなったのではなく梅になっただけなのに。彼女はキイの肉をひとつ盗んでいった。だから風が通り抜ける。だから寒いのだ。もはや街は春になるばかりなのに。

*

緑街住人管理棟での仕事はほぼ定刻に終業する。ウキシマは職員居住区内の市場で食材を選び、森に佇むちいさな家へ帰る。室内は暗い。同居人のキイはたいいてい外出しているか、はたまた眩暈を起こして伏しているか。どちらにしろ迎える声はない。ウキシマは部屋へキイがいまいことを確認し、湯を沸かして簡素な夕食をつくった。台所のテーブルへふたり分の皿を並べ、ひとりで食べる。キイの帰りの遅いことは咎めない。生活態度は管理の範疇ではない。食器を洗い、茶を淹れて本を開く。キイが帰ってきたら精神面に変調をきたしていか聴取する予定だ。脈拍体温血圧といった一般状態と発芽兆候の有無については朝に確認し記録している。半分ほど本を読んだ頃、キイが搬送された連絡を受けた。

*

ウキシマが到着すると、医師はキイをこのまま保健管理棟で生活させることを勧めた。頻繁に眩暈を起こしているからである。体調が安定していれば街への外出は許可するし、保健管理棟で生活した方がデータも取りやすいと医師は述べる。しかしウキシマは賛成しない。なぜですかと問われ、なぜでもですと答える。双子の片割れに騙されてキイが緑街へ移住したという事故が再身辺調査によりほぼ確定された時、住人管理棟責任者であるウ

キシマは雨ヶ崎植物研究所長とともにキイへ謝罪した。眩暈のためにキイはベッドへ伏していた。布団から顔すら出さず、怒りも悲しみも表さなかった。ウキシマにはそれが哀れだった。なんでも希望を叶える手配をしようと持ちかけた。唯一キイが望んだのは双子と会うことだった。しかしそれは叶えられない。ならばもういい、とキイは即座に交渉を諦めた。何度目かの面会で、他になか希望はないかとウキシマが食い下がると、キイは閉眼したまま喋った。ほんとうにもういいのです。眩暈が治っても治らなくても、寝ていればそのうちに植物になるのでしょうか。なにをしてもしなくても同じです。切れかかった糸のような声に、青白い身体に、弱々しい呼吸。四角く冷たい保健管理棟に寝ていたら植物化する前に枯れるに違いないとウキシマは感じた。それは今もまだ変わらない。だから、なぜでもと云って頑固に譲らない。

*

ベッドサイドの床頭台に剃刀が置かれていた。ウキシマは点滴を投与されて横たわるキイの手首を取って傷がないか確認した。やっではないませんよ。目覚めたキイが口角をわずかに下げた。ではどうしてここに置いてあるのですか。ウキシマが円椅子へ座り説明を求

めた。

*

もちろん、髭を剃るのに使いました。泡を立てて。頬はうまくやれた。でも顎の下が難しくくて。ちゃんと上を向いてくれないから。痩せているし。喉仏へ刃を当てるのが難しくくて。そうしたら、手が滑って、喉を切ってしまった。血が出て。血が赤かったんです。赤くて驚いて。うっかり剃刀を水へ落としてしまいました。花を開くみたいに、水が赤くなつて。喉仏からも血が垂れたから、いくつも花が開いて。驚いてしまって。身体の上も根でできているのに血が赤いんです。人間でした。彼は人間だったのです。

*

キイの頬に段々赤みが差していく。毛布の上でつくられた握りこぶしに力が入っている。ウキシマは尋ねた。それで眩暈を起こしたのですか。

*

いえ、そのあと。画廊のひとといっしょに鉢の水を取り換えました。すごく生臭かった。でも、眩暈はまだ。ビニールシートを敷いて彼を床へ下ろして、鉢を洗いました。元々両足のないひとだけれど、今は臍から下が根です。画廊のひととふたりで、抱えて上げ下げしました。重たくて。落としそうになって。最後は水に結構な勢いで戻してしまって。画廊のひとと僕も水をかぶってしまって。そうしたら。そうしたら彼が少し笑って。口を動かしたんです。ありがとうって。画廊のひとは彼が喋るのはもう随分久しぶりだと云って喜んでいました。あなたのおかげだって握手してくるんです。

*

キイは天井をにらんでいた。瞬きもしなかった。

*

でも、違う。それは、フウコが聞く言葉だ。ただ、フウコがしていたことをそのまましただけです。たった一回きり。しかも失敗した。あれはフウコが聞くべき言葉です。

*

キイは爪の先端まで力をこめていた。睫毛の一本まで力をこめていた。ウキシマの喉にこみあげる言葉はあったが、舌で押し返した。代わりに、キイの握りこぶしを静かに手で包んだ。それから、キイの喉から漏れる音を聞かないふりをした。キイの目から流れる液体も見えないふりをした。

*

かすかに春が漂った濃い霧の夜、ビールに酔ったフウコは音の外れた鼻歌を身体へ巻きつけて、キイの指先を握り、落葉樹林を散歩した。裸の枝に月が引っかかっていた。細い月は暗い夜にさみしく光っていた。かわいそうなお月さまね。危ないとキイが注意するのにも聞かず、酔っぱらいのフウコは月を取ろうとして跳ねた。キイの手が離れた。離れた指

先から樹皮に変化した。すべての変化は一瞬だった。フウコが最後に人間の目で見たのは、枝から解放された薄い月だった。

春の鳥

空を渡る鳥がいる
羽を広げて大胆に
映るのは紺碧のみ
甘い雲を餌にして
未知を越えていく



*
*

街の底から春が酒気として沸き、やんわりと雲をも包む。住人は日がな一日酔いほてる。土に酔う、光に酔う、熱に酔う。酔いが過ぎれば花となる。春はほかの季節に比べて発芽する者が多い。地面へうつぶせに、殺人現場さながらの人型としてシロツメクサの苗床となった者。頭からタンポポの綿毛を幸福に飛ばす者。ジャケットの襟元から枝を垂らし可憐なユキヤナギを咲かせた者。便座で用を足す途中、身体のある穴からとりどりの草花を生やした者。シヨカツサイ、ネジバナ、カヤツリグサ。研究所員は毎日くまなく緑街を巡回して植物化を調査する。

緑街の住人は衣食住をすべて研究所から無償賦与される。酒や煙草、コーヒーに紅茶といった嗜好品も欲しいだけ与えられる。また、研究所の一角で芥子の栽培が行われており、保健管理棟所属医師が必要と判断した住人には芥子院を紹介する。芥子院へ紹介された住人が居住区へ戻ることはまずない。もつとも、穏やかであるよう調整された住人が芥子院へ行くことも少ない。春、嗜好品の提供がほかの季節よりも増える。市場に並ぶ品目が増える。住人は誘い合って市場へ出かける。住人が楽しく心安らかに暮らせるよう、研究所